

# 船井情報科学振興財団奨学生レポート/第一回

2019年6月

東京大学経済学研究科 山岸 敦

## まずはカンタンに自己紹介

はじめまして、今年度の秋より米国プリンストン大学の経済学の Ph.D.コース（博士課程）に進学します、山岸敦と申します。現在は、東大の経済学研究科の博士2年で、公共経済学（税制や格差の問題などの政策課題や政府の在り方などの分析）や都市経済学（住宅市場や交通、地方政府など、空間的な要素のあるものの分析）を中心に色々な社会の諸問題の研究を進めています。

今回のレポートでは、私がどうやって研究者の道に入り、さらにその上で米国留学という道にたどり着いたのかの経緯を書いてみようと思います。あくまで個人的な経験談になりますが、時にそんな雑談が面白かったり役に立ったりすることもあると思うので、よろしければぜひお付き合いください。

## 研究者になんてなれっこない？

大学に入学した時は、研究者になろうなんて思ってもみませんでした。なんといっても勉強は受験でもう懲り懲りでしたし…とは言え何か熱中できるものが見つかるわけでもなく、いざ大学に入学してみても漫然と時間が過ぎていきました。時間だけは止まることなく残酷に過ぎ去る中でいよいよ手持ち無沙汰な思いが強くなり、必修の授業で後から経済学をやらなきゃいけないから、とりあえず今のうちにやっておこう、と思い立って経済学を勉強し始めました。勉強してみると中々ややこしく難しいのですが、自分が理解できないという事実が何となく悔しくて余計に喰らいつくうちに、だんだん面白さが理解できるようになってきました。…とまあ、なんとも消極的に経済学との運命の(?) 出会いを果たしました。

経済学に興味を持ち始めた私は、なるほど経済学でメンが食えるなら研究者というのは悪くないかもなあ、と次第に思うようになり、研究者への道を意識し始めました。しかし、スポーツでも何でもそうだと思うのですが、真剣に何かに向き合えば向き合うほど、自分の実力や才能の無さを痛感させられるものです。ごくごく一部の天才だけがこの悩みから逃れることができるのですが、残念ながら私は逃れることが出来ませんでした。学部時代はゲーム理論という、経済学の中でも数理理論としての側面の強い分野の勉強を中心にしており、卒業研究もゲーム理論の数理的な研究を志向し始めました。しかし、自分なりに努力したつもりだったものの、これがどうにもこうにも芽が出ませんでした。4年生の8月に東大の大学院の院試があったのですが、この頃には私はすっかり疲弊し、自信をなくしていました。

## 研究者…やっぱり、なれっこある？

大学院の面接試験の日がやってきました。希望する進路について聞かれたとき、私は修士を終えたら博士には進まない旨を伝えました。しかし、面接官のある先生から「君、アカデミアの外で活躍するというのは非常に世の中の為になることだよ。でもね、研究者というのも必ず世の中の役に立つと思うんだ。だから、ぜひ研究者の道も考えてみてほしい」と、私の書いた拙い論文を評価してそんな返答を頂きました。自分の拙い論文でもどこかに評価してくれる人がいるのか…という喜びも感じましたが、それ以上に、自分の仕事は世の中の役に立つんだという誇りを持って、その先生が日々の研究やその他

様々な仕事にあたっては尊敬の念を抱きました。経済学の研究者という仕事に、改めて惹きつけられた瞬間だったと思います。

修士課程がラストチャンスだ、そう思い直して、もう一度真剣に研究者を目指してみることに決めました。修士1年生の間に研究の芽が出てくれば研究者を目指そう、そうでなければ、諦めよう。覚悟を決めて、修士課程に進みました。修士課程では研究分野をより応用的な現在の私の研究分野に変更しつつ、とにかく論文を書いて海外の査読雑誌に掲載することを目指しました。応用的な研究をすれば、より自分の研究が世の中の役に立っている実感が得られる気がしていました（そして、少なくとも私にとってはその通りでした）し、何よりそれくらい大きな目標を立てておかないと到底他の優秀な同期に追いつけそうにはありませんでした。幸い、前述の面接官だった先生や現在の指導教官を始めとする様々な先生方、そして優秀な先輩や同期の学生から学んだり、彼らと一緒に論文を書いたりする機会に恵まれ、ヒイヒイ言いながらなんとか完成したいくつかの論文を雑誌に掲載することができました。研究者としてやっていける…そんな自信が、ようやくつき始めました。

### そして留学へ…

さて、そんな風にして研究者としてやっていこうというようやく決心できたのですが、次に私の頭を悩ませたのが留学に行くかどうか？ということです。過去の船井財団の経済学系の奨学生も口を揃えるところですが、経済学では（一部のヨーロッパの大学に加えて）アメリカのトップ大学での研究水準が非常に高く、そうした大学で博士号を取得することは経済学者の「エリートコース」となっています。実際に優秀な教授陣や学生たちから学ぶところは多いので、研究面で得られるものは非常に豊かです。これらの大学は金銭面でのサポートが一般に手厚い点も見逃せません。こうした事情を受けて、私の所属する東大の経済学研究科からは毎年多くの学生が、海外の博士課程に入学しなす形で留学します。ですがもちろん、異国で全く新しい研究環境に身を置くことには様々な失敗のリスクもあります。私もまた留学に行くか否かの決断を迫られました。

修士1年の終わりごろに、私は留学に行かないで日本で博士号を取る方針に決めました。しかし、留学に行かないと決めた以上、日本に居ながらにしてアメリカの博士課程学生と肩を並べられるくらいの勉強と研究をしなければ、グローバル化した経済学研究の世界で生き残ることは困難です。私は、自分で論文を読み込んだり、他の院生や教員を巻き込んで勉強会を開いたりして、最先端の経済学の知識を吸収しようと努力していました。こうした試みは非常に為になったのですが、それと同時に限界も感じる部分もありました。

やはり、アメリカに渡って向こうの教授や学生と真剣に格闘した方が自分をもっと伸びるのではないかと？留学しなかったことで、自分は自ら誇りに思えるような研究ができずじまいに終わり、研究者キャリアの最後に後悔してしまうのではないかと？そんな思いが次第に頭をもたげ始めました。そして、その迷いは私の脳をゆっくりと、しかし確実に侵食していきました。

### 出願、合格…

博士1年の7月末に、ようやく留学に行く決心をしました。出願は同年の12月の頭ですから、土壇場での変心です。突貫工事でTOEFLとGREを準備しました。時間もお金もないのでそれぞれ一回ずつの受験ですが、運よく何とか許容範囲の点数（TOEFL: 103/120, GRE: R 156, Q 170, W 4.0）を取ること

が出来ました。推薦状はかねてより指導を頂いてきた東大の教授の方々3名に頂くことにしました。さらに、幸いにも船井財団からご支援を賜ることも決定し、金銭的な不安もかなりの部分が解消されました。本来 Ph.D.出願は出願の数年前から意識して準備を進めていく方が上手くいきやすいもので、これから出願する読者の皆様は他の計画的な出願を行った船井財団奨学生のレポートを参考にして頂き、私の様に無計画に出願しないことを強く勧めます。ですが、無計画でも推薦状や試験の点さえ調達できれば挑戦はいくらでも出来ることは身をもって体験しました。出願に関する私からのメッセージは1つだけ、「土壇場で決心するものアリ」、です。

出願先は、私の主分野である公共経済学が充実していて、かつ都市経済学の研究についても相談できる教授が在籍している大学に絞りました。応用経済学の合格基準の潮流が近年急速に変わっているらしく出願の結果は想定以上に苦戦しましたが、結果として私の分野で世界随一であり、第一志望でもあったプリンストン大学に合格できたことは幸いでした。Henrik Kleven 教授や Owen Zidar 助教授らが率いる公共経済学グループは現状でも素晴らしい上に今後さらに大幅拡充する予定があるそうです。都市経済学についても、Stephen Redding 教授や Esteban Rossi-Hansberg 教授など分野の大スターが揃っています。私の研究分野とは多少離れてしまうのですが、日本人初のノーベル経済学賞の有力候補と評される清滝信宏教授も在籍されています。もちろん、こうした先生方に指導される学生たちも研究仲間として非常に魅力的だろうと思われまます。

Ph.D.課程は5年以上かかる長期戦なので、研究面以外に居住環境にも気を配って出願先を選びました。プリンストンは小さな町ですが、ニューヨークやフィラデルフィアといった大都市にも近く、町の周辺にもレストランやスーパーなどはそれなりに揃っています。何より静かで治安が良く、家賃などの物価もニューヨークやボストン、西海岸の一部のような異様な状況にはないため、勉強に集中できそうな環境であることも僕にとってはプラス材料でした。極めつけに、プリンストン大学の経済学部は資金が潤沢らしく、世界の経済学博士課程の中ではトップクラスの Stipend(給料)を確約してくれました。素晴らしい研究面に加え、こうした生活環境面まで考慮して出願時から「プリンストンに行きたい!」とよくこぼしていた私にとって、合格を頂けたことは文字通り有難いことでした。

## むすび

今回のレポートは明るい面だけではなく、あえて自分の悩みや葛藤の部分も滲ませて書いたつもりです。ここまでの話の通り、私はあれこれ悩んだり、遠回りしたりしながら、なんとか経済学の研究者を目指し、そのために留学するという道にたどり着きました。ああ、今から思えばもっと近道があったのになあ、悩まないで即断できる(ように見える)人が羨ましい…などと思うこともあります。

ですが、こうも思います。悩みぬいて迷って決めたからこそ、自分がどうしてそのキャリアを選んだのかについて深く理解し、同時に胸を張って誇ることができるのではないかなあ、と。自分の中で葛藤して何度も自問自答したからこそ、どうして自分が今ここにいるのか、しっかり理由付きで説明できるようになりました。そして、そうやって自分の場所について言葉で説明できる今なら、今後のキャリアの中で自分がまた悩みに囚われた時も、その悩みを解く言葉を心の中に見つけられそうです。

うん、今なら5年6年の長い留学でもしっかり踏破できそう…今こそやってやろうじゃないか、と、このレポートを執筆しながらそんな風に決意を新たにしています。船井財団の皆様のお陰で素晴らしい研究環境を頂けたことに、改めまして心より感謝申し上げます。全力で頑張ってきます!!